

第3部
平和祈念文集
【広島市・長崎市への派遣中学生の部】



※学生の学校名及び学年はいただいた当時のものです

我孫子市内の中学生の広島市・長崎市平和記念式典への派遣

事業の概要

この事業は、毎年我孫子市内に存立する六中学校から各校一名の代表生徒を選出し、広島市・長崎市が実施する平和記念式典に自治体（我孫子市）の代表として派遣しているものです。

この事業は戦後六十周年事業としてスタートし、平成二十二年度で六回目（広島市派遣五回、長崎市派遣一回）となりました。第一回目の派遣については、戦後六十周年平和事業記念誌に掲載されています。

今年度（戦後六十五周年度）も選出された六名の生徒は式典への参加や平和記念資料館の見学、被爆者体験証言グループの方の被爆体験談や平和について考える青少年フォーラムへの参加などで、原爆のすさまじさや恐ろしさを肌で学んできました。また、全員で持参した我孫子市民が作成した（折った）千羽鶴を献納するとともに、元安川の灯ろう流しに参加して、一人一人が平和の祈りを書きつづりました。

各校に戻った六名の代表者はそれぞれの学校で報告会を開き、各人が感じ取ったことを発表しました。また、市民向けの発表会では市民の方に平和の大切さや尊さを中学生自身の言葉で訴えました。

平成18年度広島平和記念式典参加者



大竹 佑奈 我孫子中学校
岡野 結美 久寺家中学校
白田 愛 白山中学校

早野 優造 湖北台中学校
花原 宏輝 湖北中学校
川野 隆介 布佐中学校

引率者

濱田 洋子 我孫子市平和事業企画運営委員会委員

平成十八年度 第二回広島市派遣

我孫子市立白山中学校二年 白田 愛

- ・被爆した川を市電から見て、今はきれいになってきているが、原爆の恐ろしさがわかった。
- ・資料館（原爆と本川小）を見て、被爆者の方々の被害や建物、川原の被害の実態を知ることができ、心が痛んだが勉強になった。
- ・式典に参加して、いろいろな人々の平和に対する考えに感動した。「心を開けば解り合える」ということはすばらしい。
- ・岩本さんの話から被爆者の方がどんなに辛い思いをされてきたかがわかった。友達をなくしたことについて、罪悪感を感じているということなど、原爆は人の心も体もただ傷つけるもので、私には許せなかった。
- ・船で似島などを見て、静かでのどかな所だったが、過去に孤児となって連れてこられてしまったこともあり、悲しく感じた。
- 三日間を終えて、原爆というものはとても恐ろしいものであり、もう二度と原爆が投下されないようにしていきたいと思った。
- 私の目標は「被爆者の方々の気持ちを少しでもわかるようにしよう」だった。実態を知ること、本当に苦しい気持ちでいっぱいだったが、被爆者の方々の辛い気持ち、核兵器をなくすことを願う気持ちを、私が一人でも多くの人に伝えたいと思った。
- 今回の学習を通して、私が一番思ったことは、「世界中のみんなが笑顔で暮らせますように」ということ。みんなで解り合い、二度と争いのない世界にしていきたい。

我孫子市立久寺家中学校二年 岡野 結美

- ・資料館を見学した。とても当時の戦争のつらさ、悲しみなどが伝わってきた。
- ・平和式典に出て、親や子どもをなくした人々の様子やどうやって死にいたったかがわかった。
- ・本川小学校に行き、当時の避難、友達をなくしたこと、濱田さんの思い、昔の学校の作りがわかって、今と全然違ったこともわかった。

・岩本さんのお話、当時の戦争の様子を聞いた。辛いことなのに、わたしたちに一つ一つていねいに教えてくれました。そして、実際の戦争体験、どうして死んでいったか、その時は、どうやって何かをしていかなければならないかなど、詳しく教えてくれました。

・灯ろう流しをした。一人一人コメントを書き、これからの思いを川に流しました。

・似島を見た。船に乗って、似島には降りなかったが、遠くから見学、他の島などもよくわかることができました。

我孫子市立湖北台中学校三年 早野 優造

・私が最も驚いたことは、我孫子に被爆者が多いということでした。自分たちは、そこに住んでいるのに、全く知らなくてこのままだといつかは、「我孫子の人は、原爆の影響を殆ど受けなかった。」という誤解を生むことになると思います。その誤解をとくのも、広島に行った私たちが伝えなければならぬことだし、それを確実に後世へ伝えてもらうように言うのも、私たちだと思います。

また、二日目の岩本さんの話を聞いて、戦争の恐ろしさ、命、平和の尊さなどを感じました。そういう戦争体験者の話を

聞くことができるということは、大変貴重なことであり、大切なことであると思います。

平和記念式典に初めて参加した私は、子ども代表の広島の小学六年生の話に感動しました。感じたことを純粹に話している感じで、純真無垢だなど思い、また、話し方もすばらしく心を打たれました。灯ろう流しに書いた願いが叶ってくれるよう、望んでいます。「世界が平和であるように！」

我孫子市立湖北中学校三年 花原 宏輝

・僕は、我孫子市の代表として、広島へ行きました。広島の地に着いたとき「きれいな所だなあ」と思いました。とても原爆が落ちたとは思えないほどでした。この二泊三日の見学で得られたのは、とても大きなものばかりでした。一番印象的だったのは、やっぱり原爆の被害でした。資料館で見学した写真は、悲惨なものが多かったと思います。皮膚が垂れ下がって、よりリアルな人形も置いてあって、今でも信じられません。原爆の落ちた映像があつて「何で原爆が落ちているのに、撮っているんだよ。」と心の中の怒りが込み上げてきました。アメリカが憎かったです。その日は、多くの外国の人が訪れていて「他の国の人も原爆に関して、関心を持っているんだなあ」と少しうれしくなりました。

被爆者の話は、とてもリアルで「どうしてそんなことが言えるのだろう」と思いましたが、きつと自分が辛くても、次の世代の人に伝えて、原爆が落ちたということを強く受け止め、一生忘れないようにしてもらうためだと思えました。この話を忘れずに、全校の人や我孫子市の人にもしっかり伝えていきたいと思えます。

「原爆」この言葉は、とても憎い。日本に二発も落として許せない。今でも世界各国では、核兵器を作っている。何処なのかわからない。広島の被爆者の方は、一生の心の傷・体の傷を負って生きなければならない。今でも苦しんでいる人が

いるということを忘れず生きていこうと思う。

我孫子市立布佐中学校二年 川野 隆介

・僕は、布佐中の代表として広島へ行きました。広島は原爆が落ちたことは知っていました。でも、詳しくは知りませんでした。そこで、我孫子市の企画する広島記念式典に参加しました。初日にいった原爆資料館では、爆心地の近くに落ちていたものや原爆の被害を受けてしまった人の人形などが展示されていました。とてもリアルな展示物に戦争の恐ろしさや核兵器の恐ろしさを改めて感じました。その中で一番印象を受けたのが、時の止まった時計です。一瞬のうちにして消えた広島を生々しく物語っているようでした。

次に、平和記念式典に参加しました。小さい頃は、テレビで見えていました。実際に体験してみると、ものすごく暑かったです。でも、式が終わった後に、原爆を受けた人は、何十倍も熱かったと聞いたとき、自分の言葉を反省しました。式典の中で、小学生が「一人の命を考えることは、みんなの命を考えること」といっていました、実にそのとおりだと思います。「命は自分だけのものではなく、自分のことを思ってくれるひとのものである。」という言葉に命のことを考えさせられました。

被爆体験の説明を岩本さんにももらいました。一番心に残っているのは「人の心から戦争がはじまる。だから、人の心で戦争をなくせる。」この言葉を聞いたとき、ただこの話を聞くだけではなく、できるだけ多くの人に後世に伝えていきたいと思いました。この派遣をとおして、原爆で亡くなった人の思いや残された家族、親戚などの気持ちを少しでもわかったのでよかったです。

我孫子市立我孫子中学校二年 大竹 佑奈

私が広島に行つて思ったことはたくさんありましたが、今、核兵器を所持している国の首相に、「どれだけの被害を受けるのかわかっているのに、それでどうしてもやるというのなら、自分の家族、友人、ましてや国民が被爆してしまった姿を見れるのですか？亡くなつてしまつてもいいのですか？」と聞いてみたいです。戦争は人災です。人災は防ぐことができず。やられたらやり返すなんて、そんなのは子どものすることです。仮にも一国をまとめる立場の人間たちが、大量虐殺をするなんておかしいと思います。相手にだつて家族がいます。悲しみから憎しみが生まれ、同じことを繰り返し、また、同じ過ちを繰り返す前に、話し合いで解決してほしいです。それが無理なら、誰も傷つかない方法を考えてほしいです。国民のことを考えるのが政治をする人たちの義務だと思います。

しかし、戦争をしてないことだけが平和ではないと思います。平和にもいろいろあつて、お腹いっぱい食べられることだつて平和だと思います。世界中のみんなが幸せになつて無理なことです。せめて、みんな自由に過ごせるようにしてほしいと思います。

平成19年度広島平和記念式典参加者



方波見 絵里奈 我孫子中学校
遠藤 雄平 湖北中学校
内形 優樹 布佐中学校

佐野 友亮 湖北台中学校
中山 雅子 久寺家中学校
山口 大雅 白山中学校

引率者

徳永 純子 我孫子市平和事業推進市民委員会委員

平成十九年度 第三回広島市派遣

我孫子市立我孫子中学校二年 方波 絵里奈

私は、我孫子市の代表として、広島へ行きました。

新幹線から降りて、広島を見たとき我孫子よりも都会なので驚きました。今の広島には、六十二年前の悲惨な様子は想像できませんでした。

この広島派遣で、私はたくさん「戦争の恐ろしさ」「平和の大切さ」を学ぶことができました。

私たちは、はじめに「原爆資料館」を見学しました。資料館の中には、当時の様々な物や写真が数多く展示してありました。その中で、印象的だったのは、「腕時計」です。その針は、原爆の投下時刻である八時十五分で止まっていました。それは、原爆の恐ろしさを物語っているように思いました。

二日目は、平和祈念式典に出席し、本川小学校へいった後、被爆者の山崎さんにいろいろなお話をさせていただきました。

現在、被爆者の方の平均年齢は七十四歳を超えています。被爆者も高齢化をし、被爆体験を後生に語り継いでくださる方も減っているのが現状です。

山崎さんが最後の方にお話ししてくださったことが大変印象に残っています。

それは、「友達を大切に」ということです。友達を大切にすれば、友達も自分のことを大切にしてくれる。「自分も大切にされている」と思うことが、山崎さんを救ってくれたのではないかと思えます。

十年後、二十年後も平和であるという保証はありませんが、唯一の被爆国である日本だけでも平和でありますように、と

山崎さんは願っていました。私もそうであってほしい、そうでなければいけないと思います。

今身近で起こっている「いじめ」「差別」などをなくしていくことが平和につながる。自分にできる第一歩だと私は考えます。どんな些細なことでも思いやりを忘れず、相手の気持ちになって考えれば、少しずつ世の中が平和になっていくと思います。今現在でも、世界中のどこかで戦争が起こっています。一日でも早く、その戦争がなくなることを願い、世界の恒久平和実現のために一人一人が、何をすべきなのかを考え、行動してほしいと思います。

我孫子市立湖北中学校三年 遠藤 雄平

一九四五年八月六日 八時十五分、広島に原爆が投下されました。それは、一瞬にして二十数万人の命を、未来を消し去ったのです。

僕は、湖北中学校の代表として、我孫子市の平和事業、広島市平和祈念式典中学生の派遣に参加させていただきました。

一日目、原爆資料館見学、ここには、原爆の爪痕が痛々しく展示されていました。八時十五分を指したまま止まった時計。面影のない真っ黒焦げになったお弁当箱など、見ていると思わず目をそらしてしまうような物がたくさんありました。その中でも、特に印象に残ったのが、タイヤのゴムは溶け、もう足の置く場が無いペダル、真っ黒になってしまったボディをまとっていた三輪車です。

原爆の投下の日も幼児は、三輪車に乗って遊んでいたといいます。このとき、こみ上げてきたものは、今も、そしてこれから先も忘れることはないと感じました。

二日目、平和祈念式典。

平和記念公園には、朝から何万人もの人でごったがえしていました。その中にいるのは、世界中からきた人の姿も多く見られました。

八時十五分、黙祷。

僕は、死者の冥福と世界平和を強く祈りました。

午後、僕たちは、被爆者で、原爆投下の日まで、原爆資料館の入り口に家があったという「山崎さん」に当時の広島のを語っていたきました。そして、それを聞いた時、戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを自分たちが語り継いでいかなければならないと、心に刻むことができました。

僕の二泊三日の旅は、どんな旅よりも大きな物を手に入れることができました。これからは、この貴重な体験を皆さんにつたえると同時に、自分自身も大きくなっていきたいと思います。本当にありがとうございました。

我孫子市立布佐中学校二年 内形 優樹

私は、市の代表として広島に行かせていただきました。広島に着いたときは、「とても緑豊かできれいな街だな」と思い、原爆が落ちた場所とは思えません。しかし、その後、二泊三日で広島のことをたくさん学び、本当に六十二年前、広島に原爆が投下されたのだと改めて思いました。

はじめに私たちが見学したのは、「原爆資料館」です。資料館には、当時の現状がわかるように、絵や写真、当時着ていた洋服や黒こげになったお弁当箱、投下されたことを示すかのように、八時十五分で止まってしまった時計が展示されており、原爆のおそろしさと悲惨さが伝わってきました。

二日目は、平和祈念式典への参加、原爆ドームの見学、被爆体験者の山崎さんのお話を聞かせていただきました。

山崎さんのお話では、「今の平和公園はきれいだけれど、私のふるさととは変わってしまった。原爆が投下され、数日たつとあたりは死体だらけで、生き残っている人も誰が誰だかわからないような状態だった。何もかもなくなってしまい、もう、死を待つしかないと思った。」と話してくださいました。

このとき、資料館で見た広島を思い浮かべ、もし、自分がそこにいたら「死を待つしかできない」と思いました。被爆した方々は、六十三年たった今でも、いつ発病するかわからず、毎日不安と戦っています。山崎さんは最後に、「唯一残った物は友情。三人の友達だけが生き残った。」と話してください、「今の平和がこれから先もずっとつづくとおもってはいいませんか。」と尋ねられました。「平和が続く保証はどこにもありません。いま以上に平和になるために、自分たちに何ができるか、考えてください。平和について考えられるのが広島です。」といってくださいました。

原爆は本当に恐ろしい物です。何もかもをうばってしまいます。六十二年がたった今、広島で起こったことを伝えていかなければなりません。

私は、今回の体験をよりたくさんの人々に伝えいき、一人一人が平和について少しでも考えてくれたらな、と思いました。

我孫子市立湖北台中学校二年 佐野 友亮

一九四五年、八月六日、午前八時十五分、

広島に起こったことは、とても悲しい出来事です。街のほとんどは、破壊され、多くの人々の生命が一瞬にして、うばわれてしまいました。生き残った人も、重度のやけどやけがをしました。その中でも、普通とは違うこの原子爆弾は、放射能に

よって人体に深刻な障害を与えました。

広島の人々はその瞬間、強烈な熱線と爆風によって破壊され、焼き尽くされたそうです。爆風によって建物は押しつぶされ、窓ガラスが割れて人々に降り注ぎました。

コンクリートも一瞬に吹き飛ばすほどの威力のものが、人間に及ぼす被害は想像をはるかに超えています。熱線によって皮膚が焼け、垂れ下がった状態で「水、水」といいながら、さまよっていたのです。

僕が原爆資料館で一番印しように残ったのは、石段に座っていた人が熱線によって、跡形もなく、消えたことです。残ったのは、腰掛けていた部分の黒い影だけでした。

僕は、「人影の石」と名付けられたその場所を見て、悲しい気持ちになりました。人がこんなにも簡単に消えてしまうものなのか。

六十二年過ぎた今現在、後障害として、ケロイド、白血病、白内障、がんといった病気で多くの人が苦しめられています。

原爆被害は、まだ終わっていません。記憶の中に残り、これからも伝えていかなければならないのです。

また、僕は当時十七歳だった山崎さんのお話を聞きました。一瞬のうちに、すべてのものがなくなるという現実直面したのです。あり得ないことですが、その日、広島でおこってしまったのです。

何もかも失った山崎さんにとって残ったのは、親友だったのです。どんなに心強かったでしょう。山崎さんは僕たちに、友達の大切さを教えてくれました。

広島という形ある、故郷はもう無いけど、友達という絆は消えることはないということ。

原爆は使用してはいけないのです。亡くなった人はもちろん、あのときに助けられなかったという人の苦しみもあります。

そして、原爆の存在しない未来を僕は心から望みます。

我孫子市立久寺家中学校二年 中山 雅子

私は、我孫子市の派遣中学生として、広島へ行き、平和祈念式典などのいろいろな体験をしました。広島は、自然が多くあり、人々は笑顔で、私は、この場所に原爆が本当に落ちて、たくさんの命をうばったとは思えないほど、とてもきれいなところでした。

この体験で一番心に残ったのは、資料館の見学と山崎さんのお話でした。

原爆資料館は、原爆が落ちた後の写真や、皮膚が熱にやられて垂れ下がっている人形、被害あった人の服などがありました。見学して思ったことは、こんなになるまで戦うなんておかしい、そう思いました。だから、これからは、こんな悲惨な戦いは繰り返してはいけない。そのような思いを他の見学者にももってほしいと、見学した後に思いました。

被爆証言者の山崎さんの話を聞いて、原爆が落とされた戦争が始まった理由は、食料がたりなくなっていたからだとこともあったといわれました。でも、それはおかしいと私は思う。人は、食べていかなないと生きてはいけない。だから食料は大事である。でも、人の命をたくさんうばってまでもやらなければいけないのか。

話を聞いた夜、ニュースで原爆を落とした人の話があった。

「原爆を落としたから、この戦争は終わった。」とその人はいった。

信じられない、落としたせいで、たくさんの人が死んだ。その人は、上から見ただけで、下のことは知らない。家族や友

達が、一瞬でなくなった人の気持ちは、わかるのか、そう思った。負けているのに、原爆を落とす理由はどこにあると言えるのか。

このような戦争は、今の日本にはない。でも、このようなことがあったのは事実であることに代わりはない。だから、また繰り返したくはない。そのために、この悲劇をたくさんの人に伝え、この悲劇をまた起こさないようにと、私は思う。

我孫子市立白山中学校二年 山口 大雅

僕は、今回のこの、広島市中学生派遣で、とても大きなことをたくさん学びました。

前日から、胸がどきどきしました。広島へ行くことにとっても興味があつたからです。もちろん、楽しい気持ちではありませんでした。代表という責任もあつたし、何より、「原爆」への興味があつたせいで、そんな気持ちにはなれませんでした。

広島について、最初にいった「原爆資料館」で僕は、原爆の悲しさ、怖さなどを痛いほど感じました。真剣に見れば見るほど怒り、悲しみ、虚無感、そして、原爆が落とされた時の痛みを想像すると冷や汗が出ました。このとき僕は、二度と原爆が落とされないことを祈りました。

二日目、被爆体験者の山崎さんの話を聞きました。この話の中で僕が一番学ばされたことがはっています。山崎さんは、様々な話をおりまぜながら、そのときの状況を話してくださいました。自分が今座っている地面が、一瞬で焦土になったのはとても考えがたかったです。そして、最後に僕達に質問されました。

「十年後、二十年後が平和だと錯覚していませんか。」と。

そのとき、僕は、確かに平和は保証されていないと思いましたが、それと同時に、これからの平和は自分たちで作っていく

のだと思いました。

もう一つ、山崎さんが言っていたことは、

「友達を大事に」です。

当たり前のことだけれど、とても大事なことに聞こえました。

僕は、三日間の中で学んだことは、絶対忘れないし、忘れられないと思います。

そして、平和を作り上げていくためにこのことを、全校や市内の人々に伝えていきたいと思っています。

平成20年度広島平和記念式典参加者



井上 潤 我孫子中学校
久我 昌江 湖北中学校
塚原 佑典 布佐中学校

高木 佳枝 湖北台中学校
戸田 香菜子 久寺家中学校
大塚 雅己 白山中学校

引率者

張 紋明 我孫子市平和事業推進市民会議委員

平成二十年度 第四回広島市派遣

我孫子市立湖北中学校二年 久我 昌江

「黙とう」という呼び声とともに、一分間黙とうをしました。

一九四五年八月六日八時十五分。その運命の日の朝、なかなか学校へ行かない子を、母は「早く行かないと遅刻しちゃうわよ。」と言って出かけさせた。子はなにか予期していたのでしょうか。八時十五分 B 29 からなにかが落ちてくる。それは「原子爆弾。」だった。一つの原爆が、一瞬にして、尊い命をうばった。

原爆資料館では、解けたガラスビンや焼けこげた服があり、原爆の恐ろしさを痛感しました。中でも、とても目を背けたくなるようなものがありました。それは、投下された後のジオラマです。火傷して皮膚が爛れ、髪の毛はチリチリに焼けて、ボロボロの衣服をまとっている。今でも頭の中に焼きついています。本当に今では考えられない事だと思います。それは、日本に平和があるからこそ、想像もできないんだと私は思います。

被爆された山崎さんは、「この原爆で家族親戚をすべて失いました。そんな時、友達がいたから、今日まで生きることができました。友達を大切にしなさい。一人になった時、友達だけが頼りだからね。」とおっしゃっていました。その言葉は私の心に響きました。友達は一生の宝です。

「平和だな。」と感ずることが、今は薄れていると思います。平和とはどういうこと？と思う人もいると思います。平和とは、食べ物が食べられること、服が着られること、運動できること、字が書けること、家族がいること、友達がいること、などではないでしょうか。小さな平和はやがて大きな平和とつながるのだと私は信じています。

今も苦しむ高齢者の被爆者。 “多くの人に知ってもらいたい” との願いを込めて、一生懸命伝えていきます。私達が今聞いて、より多くの人に伝えなくてはならないこと、今回の二泊三日の広島での体験を通して、感じました。

私のそしてあなたの隣にいる人々の笑顔の為に、平和への関心をもつことから始めてみてはどうか。

「平和を伝える」

我孫子市立我孫子中学校二年 井上 潤

八月五日から七日、我孫子の派遣中学生として広島に行った。初日は新幹線で広島に着くと、平和記念資料館に行った。見学している間は、言葉が出なかった。特に印象に残っているのは、真っ黒に焼けこげたお弁当だった。その帰り道には、たくさんの石碑があり石碑の裏には、数えきれない程の人の名前が刻まれていた。戦争の怖さや悲惨さを目の当りにして、すっかり気持ちが沈んでしまっていた。でも、一緒に行った我孫子の他の中学校の友達が存在が沈んでいた気持ちを明るくしてくれた。と同時に今の平和な時代の日本に生まれた事に感謝した。翌日原爆投下当日六日は朝五時に起きて、平和記念式典に参加した。六十三年前にそんな悲しい戦争があった事がうそのように広島街はきれいだった。平和記念式典には、総理大臣や各国の大使などたくさんの人が来ていた。それぐらい、世界中が戦争を忘れないように心に刻もうとしているんだと感じた。悲しい戦争を忘れないための式典で、広島空に一勢に鳩が飛び立ったのが印象的だった。夕方から灯籠流しに行った。灯籠に「笑顔でいられる世界にする」と僕の思いを書いて、川に流した。たくさんの灯籠が流れていてとてもきれいだった。三日目、間近で見る原爆ドームは今にも崩れそうで六十三年前の恐怖がよみがえりそうな迫力だった。三日間の内に二人の被爆体験者の話を聞いた。映像ではなく、話しを聞いているだけなのに戦争の怖さが伝わってきた。生きている

からこそ、亡くなった人達の思いや戦争の愚かさ平和への願いを伝えようと、思い出したくもない体験を話してくれた。この三日間で命と平和の大切さを改めて実感した。今でも、原子爆弾を持つ国がある事に腹が立ち、悲しい。戦争の愚かさ、原爆の怖さを伝え、平和で楽しく暮らせるために、今回の僕の思いをできるだけ多くの人に伝えて行きたいと思う。

我孫子市立布佐中学校二年 塚原 佑典

私達六名は、市内中学生の代表として、平和記念式典へ出席、参加しました。また私は、このとても貴重な体験に責任をもつため、団長も務めさせて頂きました。

一九四五年、八月六日、午前八時十五分。『子供たちは、「いってきます。」と出かけ、「ただいま。」と帰ってくる。原爆は、こんな当たり前の毎日を一瞬で奪いました。六十三年たった今も帰りません。』平和への誓いの言葉です。

広島は一つの原子爆弾がさく裂した瞬間、「強烈な熱線・爆風・地表温度三千度以上」と、二キロ以内を全て焼き尽した地獄です。そして、約十四万人と言われると尊い命を奪い、現在も苦しみ続ける人々をつくり出してしまいました。

平和記念資料館では「焼きただれた制服・高温による溶融塊・食べるはずだった母の手作り弁当・一瞬の閃光で亡くなられた人影の石・・・」。

また、原爆ドームは皆さんもご覧になった事もあると思いますが、爆心地は市内の道端にひっそりと「碑」だけがありました。

これが現実に来た事なんだ。そして私達と同じ中学生、この世に生を受けたばかりの赤ちゃん、多くの人達の命を奪ったんだ。また、二歳の時に被爆し、白血病で亡くなられた佐々木禎子さんは、生きる希望を折り鶴にたくしていました。私

は、正直その時の気持ちを考えて、考えられませんでした。恥ずかしいですが怖かったです。

『平和』 今回の体験でこんなに難しい言葉とは思いませんでした。被爆体験者の伊谷さん・山崎さんのお話からも、「平和は約束されているものではない。核兵器を使わせない役目は日本にある。」

そして、私達の体験から各学校を通じて多くの方々に事実を知っていただき、それが、明るく笑顔に満ちあふれた平和世界を築き続ける、一歩となると思えました。

「一つの悲劇から学んだ事」

我孫子市立湖北台中学校二年 高木 佳枝

昭和二十年八月六日、午前八時十五分、広島に原爆が投下されました。

小さい子供から、お年寄りまで、多くの尊い命を一瞬にして奪った原爆は、やつとの思いで生き抜いた人達をも苦しめました。

放射線の影響で、突然の病に倒れる人。家族や友達、家を失い帰る場所を無くした人。

私は、言葉を失いました。

二度とこのような悲劇を起こしたくないと思い、多くの人にこの事を伝えたいと思いました。

そして、もう一つ気づいた事があります。それは、身近にある幸せを、もっと大切にしなければ、ということなのです。

私には、大勢の大切な友達があります。帰る家があります。そして、「おかえり」と言ってくれる大切な家族がいます。

時には、喧嘩をしたり、悩んだり、涙を流す事もあるけれど、毎日笑顔で暮らせるという事が一番の幸せなのではないかと

気づかされました。

そしてそれに、感謝をしなければ、と改めて思われました。

一つの悲劇から学んだ事。

それは、感謝をする心を忘れずに、今を大切に生きるという事です。

原爆が投下された事で、命の大切さ、尊さを知り、生き抜いてくれた人がいたからこそ今の日本がある。それにより、当たり前のようで気づかなかった、多くの事を教えてもらいました。

今ある幸せを無くさないように、見失わないように、これからもずっと大切にしていけます。

そして、このような悲劇を二度と繰り返すことのないよう、今私にできる事を精一杯にやっていきたいと思えます。

「広島へ行って」

我孫子市立久寺家中学校二年 戸田 香菜子

世界で初めて原子爆弾を落とされた広島。そのことは、ほとんどの人が知っています。しかし、実際にどんなことが起こったのか、どんな悲惨な状態であったのかということ詳しく知っている人は、そう多くないでしょう。私もその一人でした。テレビや新聞で少し見て、知っているつもりでした。

広島へ行き、資料館で目にしたものは忘れられないものばかりでした。炭になってしまったお弁当、皮膚がたれ下がりのような格好をしている人、顔のパーツの位置がわからない人。また、後遺症の恐ろしさにも、驚きました。元氣そうに見える人が数日後、突然亡くなったり、有名である佐々木禎子さんのように十年もたった後に白血病になったり、と火

傷などで亡くなる人ばかりでなく、色々な病気になったのです。原爆は本当に恐ろしいということがわかりました。恐ろしいという一言では言い表せない程のひどさです。

六十三年前、こんなに悲惨なことが広島で起こり、他の国も原爆の恐ろしさを知ったはずです。それなのに、八月五日現在六百六十日前に核実験が行われました。今から一年と少し前です。まだ、戦争をしている国、原子爆弾を持っている国は、今すぐやめてほしいです。何も悪くない人達が虫けらのように死んでしまうのは、あまりにもかわいそうです。

そのために私のできることと言ったら、広島で感じた色々な気持ちを友達をはじめとする周りの人に話すことしかありません。でもその伝える、ということはとても大切だと思います。だから私は広島で感じたことをたくさんの人に伝えていきます。

最後に他の中学校のお友達ができてとてもうれいす。なかなかこういう機会はないもので、大切にしたいです。

我孫子市立白山中学校二年 大塚 雅己

今回、広島の平和祈念式典に参加する機会を与えられとても光栄でした。

僕は、今まで戦争の爪跡が残っている地に行ったことがなく戦争には無縁でした。また、平和な世の中に生まれてきて何不自由なく暮らしてきたので戦争についてあまり深く考えたことはありませんでした。しかし、戦争について知っていくと今の平和な世の中はそのような過去があったからだということを実感することができました。

派遣初日は、資料館の見学に行きました。資料館には、遺品や写真、実際の建物が展示されていました。数多くの展示品の中でも特に印象に残っているのは投下直後の様子を表したジオラマです。人の皮膚はたれさがり、服はボロボロで生気は

なく目をそむけたくなるような光景でした。まるで地獄を見ているような感じでした。また、壁に残った人影も印象的でした。放射線の影響で座っていた人の影が黒っぽくなっているのを見てとても驚きました。

二日目に主な目的である平和祈念式典に出席しました。黙とうの時、何とも言えない気持ちになりました。八時十五分原爆投下、その瞬間人は焼け、建物は崩壊したことを思い浮かべると原爆を二度と落とさせてはいけないという気持ちが強くなりました。

また、被爆体験者の方のお話を聞きました。体験者の方のお話は資料で見ているよりも残酷で恐ろしいものばかりでした。原爆は投下された瞬間だけが恐ろしいものだと思っていました。しかし、お話を聞いていると投下された後も怖いということが分かりました。投下された三日後ぐらいには死体の山にウジがわき一面が真っ白だと聞きゾツとしました。また、生き残っても放射線を浴びたせいで亡くなられる方もいたと聞き悲しくなりました。

今回は、広島市に行つて体験者のお話を聞いたり、資料を見たことを生かして原爆の恐ろしさを訴えていき多くの人に理解してもらいたいです。

「平成二十年度広島市平和記念式典に参列して思うこと」

我孫子市平和事業推進市民会議委員 張 紋明

「水をください」、「おかあさん」、「死んだほうがまし」など、被爆し苦しみながら亡くなられた方々が残した言葉です。

この言葉だけでも心がいたくなりますが、実際に原爆ドームや資料館を見学して、目の前で見たもの全てが衝撃的でした。爆風・熱線・放射線などの原爆の被害があんなに悲惨であることを本当に実感しました。学校で習ったものとは比べものにならないものでした。また、被爆者の方から直接話を聞く機会がありました。被爆された方は被爆された時の状況によって、それぞれの思い（例えば、日本の敗戦に対する気持ち・生きてきた人生観の違いなど）が違っていることもわかります。被爆者の方たちの生きる力がとても強いことがわかりました。更に遺族の方々や広島多くの市民が世界に向けて平和を訴えている姿を見てすごく感動しました。原爆ドームは日々風化し、いつか消える可能性があります。だからこそもつと日本全国・世界の人々に広島を見てもらいたいと思います。原爆ドームは世界遺産です。世界一番悲しい、そして最も反核・反戦争を訴えることのできる象徴です。今、日本は平和です。それは被爆され亡くなられた方々のおかげだと思います。被爆者の犠牲を無駄にせず、この平和な世界を大切にしていかなければなりません。それはまず一人一人が平和について考え、平和を守る気持ちを持つことが最も大切だと思います。私は平和を考えると、また子どもたちに平和の大切さを伝えるとき、手賀沼公園内の『平和の記念碑』（被爆した旧庁舎の一部を譲り受けたもの）を訪れたいと思います。最後に亡くなられた方々のご冥福をお祈り致します。

平成21年度長崎平和祈念式典参加者



久保田 涼香 我孫子中学校
今 和香菜 湖北中学校
今村 拓夢 布佐中学校

檜山 結衣 湖北台中学校
小川 叡 久寺家中学校
大屋 貴義 白山中学校

引率者

今井 瑞萌 平成17年度広島平和祈念式典参加中学生・我孫子市平和事業推進市民会議委員

平成二十一年度 第一回長崎市派遣

「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典中学生派遣に参加して」

我孫子市立白山中学校二年 大屋 貴義

私たち六名は、我孫子市の中学校の代表として、被爆六十四周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典及び青少年ピースフォーラムに参加してきました。

長崎の町は路面電車が走り、車や人通りも多く活気にあふれた平和な町でした。かつてその町が、一発の原子爆弾で焼け野原になったとは、全く考えられませんでした。一瞬で七万四千人の命を奪い、七万五千人に傷を負わせ、六十四年経った今もなお白血病等で人々をおびやかし続けています。

被爆六十四周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典では、長崎市長さん、被爆者代表の奥村さんを始め、内閣総理大臣、国連総会議長等沢山の人が核廃絶を呼びかけました。しかし、いまだに核兵器として使用できる核弾頭が世界中に二万六千発ほどあるといわれています。威力も性能も長崎や広島のものよりはるかに高くなっているそうです。オバマ大統領がプラハで「核兵器を無くしていくために行動していく」と宣言しました。とても嬉しい演説でした。一刻も早く無くして欲しいと思います。

戦争や核兵器を無くしていくのは、簡単なことではないと思います。課題が沢山あります。例えば、戦争を体験した人達が高齢化し、その悲惨さや経験を語り伝えていくことが難しくなっていることや自国を守るという理由でいまだに核実験を強行し、核開発をしている国があることなどです。そういう問題を解決していかなくては平和な世界はないと思います。

今回の長崎派遣に参加し、平和な社会の実現に向けて私たち中学生でもできることが沢山あることを学びました。私たち六名が今回の体験を報告したり、我孫子市の平和祈念式典に参加したり、平和事業に関心を持つことも平和な社会の実現につながると思います。もっと身近なことで考えれば、学校生活そのものに目を向けて、改善していこうとすることも平和についての大切な勉強だと思います。

「平和のために自分にできることを考え、どんな小さなことでもやり続ける」ということが本当に大切で、私たちに必要な考え方だということも学びました。今後も「平和」という言葉の意味や重たさを心に刻みながら、今回の長崎派遣を生かしていきたいと思えます。

貴重な体験の機会を与えていただいたことに、心から感謝しています。ありがとうございました。

「長崎で学んだこと」

我孫子市立湖北中学校二年 今 和香菜

私は、八月八日から八月十日の三日間でいろいろなことを学ばせていただきました。

一日目に行った青少年ピースフォーラムでは、班全員で紙芝居「ふりそでの少女」を朗読しました。物語は悲しいお話でした。

ピースフォーラムの開会式では、原爆被害者の山脇さんの体験談が聞けました。山脇さんは、被爆当時十一歳で、爆心地から二・二キロメートル離れた自宅で被爆しました。翌日になつても帰つてこない父親を、兄弟三人で工場まで迎えに行きました。父親の工場が爆心地から五百メートルも離れていない場所だったため、見分けがつかない姿で亡くなっていたと

いうお話でした。これを聞いて、改めてその場にいた時の怖さや命のはかなさを感じました。

夕方から行われた平和の灯コンサートでは、何百個あるか数え切れないほどのキャンドルが並べてあり、夜の会場は一斉に火をつけられたキャンドルで明るくなり、とてもきれいでした。

二日目は平和祈念式典に参加させていただきました。テレビで見て、いつかは行きたいと思っていたので、参加できて本当にうれしかったです。平和宣言が終わった後、一斉に鳩が飛んでいった時は、とても感動しました。黙とうの時は、被爆した人達の悲しみや恐怖感などを感じました。アメリカやロシアなど世界にある原子爆弾はもう絶対に使ってほしくありません。今回の平和祈念式典は絶対に忘れることのできない思い出となりました。

午後は原爆資料館にも行きました。入場口は暗く、原爆の実物大の模型や被爆して変形したガラス瓶や石などが展示されていました。当時の様子を写した写真は、被爆して火傷した人や亡くなった人、爆風でなぎ倒された木や建物など目をおおいたくなるものばかりでした。

三日目は出島に行きました。オランダやその他の国から日本へ伝わったものが、わかりやすく展示してありました。社会の授業で学習したことがあったので興味を持って見学することができました。昔の長崎がとても国際色豊かで平和だったことを実感しました。もし戦争がなく、原爆も落とされなかったら、ひよつとしたら現在の平和な長崎よりもっと風情のある国際色豊かな町並みが残されていたのかなあと思いました。

短い三日間でしたがとても貴重な体験をさせていただきました。本当にありがとうございます。この三日間で学んだことを学校で発表したり、友達に教えたりして、色々なところで活かしていきたいです。

「長崎派遣に参加して」

我孫子市立我孫子中学校二年 久保田 涼香

初めての長崎、初めての乗り物、初めての行事、初めての人々、原爆についてふれるのも初めて、とにかく戸惑ってばかりで大変でした。

青少年ピースフォーラムでは、Bコースのフィールドワークでした。さまざまなモニュメントがあり、その数は十五個もありました。独特な形をしていて不思議でした。

平和の灯コンサートのときの黙祷では、何故か泣きそうになりました。鐘の音が心に響きなぜか胸が痛くなりました。歌もキャンドルも綺麗でした。

平和式典での「戦争は長崎だけで終わりにしてほしい」というその言葉がとても強く感じられました。また、オバマ大統領にも原爆のことをもっと良く知ってもらい、協力してもらいたいと思いました。お昼ご飯を食べている時、隣のおばあちゃんとおじいちゃんが原爆はどんな感じだったのかを良く教えてくださいました。「この先ずっと平和でいてほしい」と何度も何度も言っていました。その他にもたくさん教えてくださいました。

青少年ピースフォーラム二日目、今回は「平和」について北海道や沖縄、近場では松戸市内の中学校の人達と一緒に考えました。色んな人の色んな意見が聞けて、楽しく、深く考え学ぶことができました。初めて会ったばかりでしたが、協力することができました。

夜はロープウェイに乗り、夜景を見ました。すごく綺麗でした。星も見たかったです。二日目の夜は、何か六人の仲が深まったような感じがしました。

原爆資料館で一番印象に残ったのは、原爆の実物大の模型です。かなりの重さではあるものの、大きさは思ったよりも大きくありませんでした。一つの爆弾、わずかな時間で七万数千人の命を奪ったなんて、すごい威力で恐ろしい凶器だと思いました。また、実際着ていた服や怪我をした人々の写真、骸骨が転がっている写真、形のないビン、体内に入っていたガラスの破片など、さまざまな物がありました。改めて考えさせられました。

今回体験してみて、「平和について」の願いや思い「命について」の大切さなどをすごく思い知らされ、感じることができました。生々しさや恐怖、悲しみなどの感情が伝わってきました。本当によい体験ができたと思っています。ありがとうございました。

「長崎派遣に参加して」

我孫子市立布佐中学校二年 今村 拓夢

僕が、長崎に行くこと決まったところは、「長崎には原爆が落とされた。」ぐらいのことしか知りませんでした。それに原爆と言われて真っ先に思いつくのは広島原爆ドームであり、平和祈念像を思いついてもその名前が分からないといった状態で、長崎のことについては全くといっていいほど知りませんでした。

飛行機に乗り、長崎に着くと東京とは違った暑さが出迎えてくれました。その後青少年ピースフォーラムに参加しました。被爆者の山脇さんの話を聞くと、今では考えられないような内容でした。被爆後亡くなった少年の口や鼻から回虫がウジャウジャ出ていた話や白い帯だと思ったらお腹から腸が飛び出していた話など想像しただけで気持ちが悪くなる内容でした。

また、僕はBコースだったので平和公園を散策しました。ガイドをしてくれたボランティアのお姉さんからは、「原爆で

浦上が一瞬にして廢墟となり、爆風で重いはずの石がずれてしまいました。原爆が落ちたときの土地が残っており、茶わんなど生活に必要な物がそのまま地面の一部になっていました。今でも見つからない人がいるそうです。そんな土地の上で私たちは立っているのです。」というような説明を聞きました。さらに、ボランティアのお姉さんが持っていた写真には、真上で爆発したので木が倒れずに立っていたのがありました。僕にはその写真がとても奇妙に見えました。コースを全部巡り終わって原爆資料館に帰る道の途中で、お姉さんに「なぜ原爆は長崎より広島の方が有名なのですか？」と質問しました。するとお姉さんは、「長崎より広島の方が死者が多いんですよ。それは、長崎の地形が守ってくれたんやと思うよ。やつぱり死者の数やないかなあ。」と言っていました。それを聞いて「周りが山ばかりの地形で被爆者の数が少なくなったのは不幸中の幸いだったのかな。」と思いました。

二日目の八月九日、平和祈念式典に参加しました。被爆者である奥村さんの平和への誓いの中に「一口も水も飲むこともできずに亡くなった人々よ…」と言っている箇所がありました。その時に周りを見るとお茶や水を飲みながら話を聞いている人の姿がありました。「この水を一口でも飲ませてあげたかった。」と思うのと同時に「ああ、平和っていいな。」と戦争のない時代を生きている僕は本当に幸せだと思いました。原爆が投下された午前十一時二分、長崎の鐘が鳴り、皆黙とうをしました。黙とうをしている最中に「助けてくれ。水をくれ。」などと亡くなった人々が叫んでいる感じがしました。僕は、亡くなった人々の冥福を祈りました。この長崎の式典に出席したことで、このような悲しみを二度と起こしてはならないと強く感じました。会場となった平和公園には、平和記念像があります。天を指した右手は原爆の悲惨さを示し、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じた目は戦争犠牲者の冥福を祈っているそうです。

僕は、世界が争いもせず平和になることを願います。今回参加したことで、この長崎で起こった原爆の恐ろしさを我孫子

はもちろん、日本、世界中の人々に伝え、忘れさせてはならないことであると強く思いました。

今では長崎について沢山のことを知ることができました。貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。本当にありがとうございました。

「長崎に行つて」

我孫子市立湖北台中学校二年 檜山 結衣

私は、長崎に行つて学んだことが沢山あります。

一日目は、青少年ピースフォーラムへ参加をしました。青少年ピースフォーラムでは、被爆者（山脇佳朗さん）が実際体験したことを話す講話が行われました。山脇さんのお話しでは、原爆が投下された頃の爆心地付近の地図の説明や原爆当時の説明がありました。話を聞いていて驚いたことは、原爆の表面温度が二千五百度〜三千度ということと、山脇さんの家に青白い閃光が突き刺さり、色々な物が落ちてしまい、一瞬にして世界が変わってしまったことです。でも三千度という温度は、想像できないぐらい熱いと思うし、一瞬にして変わるといふことは、とても恐ろしいと思いました。山脇さんは、広島と長崎の原爆について過去のことのように考えないでほしい。世界で行われている核をやめてほしい。そして、アメリカなど多くの人々に原爆を伝えることが今の生きがいだと話してくださいました。

この講話が終わった後、参加している色々な地域の人と長崎の高校生といくつかの班に分かれて話し合いが行われました。一日目は、山脇さんの講話をもとに、平和案内人の説明で学習ワークシートを書きました。二日目は、自分が幸せなとき、幸せでないとき、今私たちにできることを考え、それぞれ書き、模造紙に貼って、『戦争をなくすためには』というテーマ

で平和宣言文を作りました。

私たちが長崎に着いてから二日経った八月九日、この日は、長崎に原爆が落とされた日です。私たちは長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参加しました。長崎市長さんを始め多くの人の挨拶を聞きました。青少年ピースフォーラムでも学習しましたが、世界が平和になるのは、とても難しいことなんだなあと感じました。今もどこかの国と国で戦争したり、核実験を強行したり、そのために亡くなった人、悲しんでいる人、やめて欲しいと願っている人が沢山いることを私たちはけっして忘れてはいけない、今の若い世代が次の世代へ伝えていかなければならないと思いました。今、私たちが幸せであることもあたりまえではなく、すごいことだと思いました。今回、平和祈念式典に参加し、たくさん学ぶことができました。自分を見直すよいきっかけにもなったのでとても有意義でした。

三日間良い体験ができたことに心から感謝し、その中で学んだことは今後に必ず生かしていきたいと思えます。

「長崎に行つて」

我孫子市立久寺家中学校二年 小川 勸

長崎平和祈念式典に参加して思ったのが、この平和式典は日本の行事ではなく、世界の行事だなということでした。それは、外国の人達が沢山参加していて、平和について世界中が考えていることがわかったからです。この式典は、毎年遺族の方やさまざまな人が出席しています。その人達の平和に対する強い思いが伝わってきました。

ピースフォーラムでは、被爆者の山脇さんの話を聞いて、原爆の怖さを改めて実感しました。その後は、Bコースで平和公園の付近を見学して回りました。そこでは、平和を祈って造られた数々の像や碑の説明をしていただき、浦上天主教堂や平

和祈念像、平和の泉など建造された理由や沢山の人の思いがわかりよかったです。他にも様々なモニュメントがあり、世界各国から平和への思いを寄せて寄付されたものでした。

二日目は、平和について話し合いました。「今は平和なの？」や「平和じゃない状況って？」などの題で話し合いをしました。自分たちの班は、戦争がある限り平和ではないという結論が出て、その解決策をみんなで考えました。自分は、「毎日ニュースを見て、世界の状況を知る。」という決意をしました。これを毎日続けていきたいと思えます。

市内見学では、我孫子市平和市民会議の大久保さんが長崎市出身ということもあり、長崎市の名所を案内してくださいました。とても楽しく見学することができ、思い出に残りました。

今回の長崎に行つてわかったことは、日本は唯一の被爆国ではなく、核実験でも被爆している国々があるということ、日本は、いつも被害を受けていたのではなく、日本からも被害を加えていたということ、そして原爆は過去のことではないということです。このことは、絶対に忘れてはいけないと思えます。二度と同じ過ちを繰り返さないようにするために、自分たちのような若い世代がこれからの時代を支えていかなければならないと強く感じました。自分が目で見て、心で感じたことを身近な人達に伝えていくことから始め、より多くの人達に広げていかなければならないと思えます。

今回の貴重な体験をさせていただいたことに感謝し、平和な世界にするために、これから自分ができることを進んで行つていきたいと思えます。

広島・長崎両派遣を通じて

第一回広島派遣中学生・我孫子市平和事業推進市民会議委員 今井 瑞萌

今から五年前(戦後六十周年時)、当時私は湖北中の三年生で、広島派遣の中学生の一期生として広島の平和祈念式典へ参列した。そのときの記憶もまだ新しい昨年(戦後六十四年時)、今度は長崎派遣の中学生の引率として長崎の平和記念式典へ参列することとなった。我孫子市の平和事業で原子爆弾の落とされた二つの都市へ行き、個人の旅行では体験できないようなことに参加できたことは、私にとってかけがえのない経験となっている。

昨年の長崎派遣では、平和祈念式典の参加・原爆資料館の見学の他に、私たちは中学生と一緒に「青少年ピースフォーラム」というものに参加した。このフォーラムでは、勿論被爆体験者の生の声を耳にすることもできたが、その名のとおり、青少年(高校生など)が中心となり、二日間かけて長崎に降り注いだ原子爆弾の脅威を伝え、他都市からの参加者と一緒に「平和」を考えるとというものであった。私が中学生の引率として参加したグループでは、被爆建造物等のフィールドワークや平和についての意見交換を行った。フィールドワークも学生が主体となり、その地その地の説明をしてくれた。長崎では、被爆体験者の方の生の声を聞く機会が広島へ行ったときよりも少なかったのだが、五年前に広島へ行ったときに感じた原子爆弾への恐怖や戦争への怒りというものを、しっかりと感じ取ることが出来た。長崎の若い世代は、「原子爆弾の投下という過去を後世へ伝えたい」という強い想いをもち、被爆者の方々、戦争体験者の方々の想いを引き継いでいるのである。

私は、広島・長崎という二つの都市の平和記念式典へ参加し、被爆体験者や戦争体験者の生の声を聞くことで、改めて原子爆弾の脅威や戦争の引き起こす悲しみを知った。また、長崎のような若者による語り継ぎは、戦争というものの恐ろしさ

を知らない・知る機会がとて少ない現在の若い世代には、いい刺激となり、同世代で戦争や平和について考えるきっかけへと繋がるものであると考えることにつながった。私自身、五年前の広島派遣がきっかけとなり、戦争や平和について考えるようになったのである。つまり、若い世代が戦争や平和について考えるようになるためには、なにかしらのきっかけが必ずやなのである。それは、被爆体験者の方や戦争体験者の方の生の声を聞く機会を設ける、若しくは、派遣中学生の報告にとどまらず、長崎にならって若い世代による歴史伝達機会を設けるなど、様々なものが考えられるだろう。今後は、ただ戦争があつたという事実を教えるのではなく、考えるきっかけを与えられるような伝え方をしていく必要があると考える。

私にとって、被爆者の方の生の声にふれることのできた広島派遣、若い世代が後世へ伝えていくための術を教えてください。長崎派遣は、今の私を形成する大切な体験である。そんな貴重な体験をする機会を与えてくれた多くの方々に感謝の気持ちを表現するためにも、この二回の派遣を通じて得たものを活かし、戦争を知らない世代が戦争や平和について伝えていかなければならないのである。

今でも思い出すのは、広島での体験談を語ってくださった被爆者の方の涙をこらえながらの震えた声や涙をこらえた表情である。いつかこの世から争いごとがなくなる日がくることを、心から祈っている。

平成22年度広島平和記念式典参加者



廣田 直斗	我孫子中学校	小笠原 映美	湖北台中学校
高橋 彬	湖北中学校	前野 陽	久寺家中学校
小林 瑞歩	布佐中学校	郡山 琴美	白山中学校

引率者

間中 くるみ 我孫子市平和事業推進市民会議委員

広島市語り部

三登 浩成

一般参加

和田 三千代 我孫子市平和事業推進市民会議委員

木田 典子 我孫子市消費者の会

平成二十二年度 第五回広島市派遣

広島と原爆

我孫子市立我孫子中学校二年 廣田 直斗

広島平和事業派遣中学生の一員として、広島市へ行ってきました。そして、戦争・原爆など様々なことを学ぶことができました。

一日目。この日は原爆資料館を見学しました。これまでもテレビや社会科の資料で原爆の被害や恐ろしさを知っているつもりでしたが、原爆資料館の映像を含む資料は想像を絶するものでした。自分は何も知らないことに気づきました。原爆は当時だけでなく、今も多くの人の心と身体に大きく深い傷を残したままであることを改めて感じました。

資料館見学後、「原爆の子の像」へ行き、我孫子市の皆さんから預かってきた折鶴を掛けました。そこには様々な人たちからの多くの折鶴が掛けてありました。一羽一羽から、折鶴を折った人たちの平和への願いを実感しました。

二日目。広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式に参列しました。広島市長の平和宣言を聞いた時、「平和を創り出すのは自分たちの義務であり、必ず実現させなくてはならない。」と心に強く思いました。さらに「二〇〇二年までに核をなくすために自分にできること」を自問自答しました。

記念式典後、被爆者の伊谷さんと幸本さんからお話を伺いました。資料だけではわからない原爆の恐ろしさ・被爆者の苦しみが心に迫り、まるで核兵器の恐ろしさを自ら体験しているようでした。

三日目。原爆ドームに行きました。間近に見る原爆ドームは、予想以上にきれいに保存されていたので驚きました。

原爆ドームのすぐ脇で体内被爆者の三登さんから伺った、「被爆した人は、それだけで差別を受けた。」というお話から、被爆者の心の痛みを感じました。

今回の派遣を通して、「戦争や原爆がもたらすものは、痛みと生きていくうえでの重荷であること。」「自分が核兵器のない世界を創り出さなくてはならないこと。」そして「復興して大都市を創り上げた広島の人たちの力。」です。

貴重な体験の機会を与えていただき、本当に感謝しています。

「ヒロシマ」へ行って

我孫子市立湖北中学校二年 高橋 彬

僕にとって何もかにもが初めての「広島」でした。当然、広島で行った事、見た事、聞いた事、その全てが心に残りました。その中でも、ものすごく印象に残った事が三つあります。

一つ目は、広島平和記念資料館（原爆資料館）で見た数々の資料です。

まず目に付いたのは、原爆が投下された時の模型です。建物の建っていた跡はあるけれど、ほとんど何も無くまるで更地になっていました。僕は初めて原爆の怖さを実感しました。

「核の地球儀」からは、核の保有国と保有数がわかりました。想像以上に多くの国が核を持っていることを知り、ショックを受けました。また、被爆して熱線を浴びた人を再現した人形もありました。着ている服はボロボロで、髪の毛はボサボサ、皮膚がむけてたれさがっていました。人間をこんな姿にするなんて。「もうあつてはならない！」と思いました。

他にも、原爆の仕組みや原爆の威力・すさまじさが分るものがたくさんありました。「原爆を二度と使ってはいけない。」

と強く感じました。

二つ目は、原爆の子の像です。

モデルとなった「禎子さん」は、幼い頃に被爆し、少し大きくなってから白血病にかかってしまいました。元気になりたいと願いながら千羽鶴を折り、一生懸命病氣と闘ったけれど亡くなってしまった人です。「原爆の子の像」のまわりには、千羽鶴がたくさんかけられていました。数えることさえできない多くの千羽鶴を見て、本当に多くの人が平和を願い、戦争や原爆について考えていることを知りました。そして、僕自身も平和・戦争・原爆について真剣に考えなくてはいけないと思いました。

三つ目は、被爆者の方々から直接話を聞いた事です。

直接お話を聞くことで、よりリアルに、より鮮明に「ヒロシマ」を感じることができました。辛く厳しいお話は、思い出ではなく、今も続いているのです。

今回の広島での貴重な体験を自分だけにとどめず、身近な友人を始めとして、より多くの人に伝えたいと思います。

平和を願って

我孫子市立布佐中学校二年 小林 瑞歩

戦争を知らない私には、広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式への参加や広島市平和記念資料館をはじめとする多くの資料館・慰霊碑などの見学、被爆体験者の方々からの直接のお話など、貴重な三日間でした。

多くの資料から、一つの原因で一瞬にして大勢の人が亡くなり、家や学校など何もかもがなくなってしまったことがよく

分りました。展示されているものを見ていただけで、本当に怖くなりました。「今、自分がその場にいたら」と思っ
てしま
い、怖くて言葉も出ません。

広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式へ参列した時には、前日に原爆資料館や「原爆の子の像」を見学していたため、「広
島市長の平和宣言」や「広島の小学生の平和への誓い」など、深く考えさせられました。

被爆体験者三名の方々からの話は、つらく、悲しいものでした。「命を大切に」「笑顔を忘れずに」「地に空に平和を」と
言う言葉は私の心に迫り、私自身がもう一度考えなくてはいけないことだと思いました。

二日目の夜、灯ろう流しに参加しました。我孫子市平和事業派遣中学生として参加した我孫子市内の中学校代表者とともに、
灯ろうに書く言葉を考えました。そして書いたのは「日本中、世界中が、いつまでも平和でありますように」です。言
葉はありきたりかもしれませんが、心から願って書きました。そして、流れていく灯ろうを「私たちの思いが日本中、世界
中に届きますように。分ってください。核の恐ろしさ、命の大切さを。」と願いながら見送りました。

今でも戦争をしている国や核兵器を持っている国があります。二度と「ヒロシマ」が起きないように、日本はもちろん、
世界中が平和であることを願います。

広島で学んだこと

我孫子市立湖北台中学校二年 小笠原 映美

昭和二十年八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が投下されました。

原爆は、一瞬にして、広島を破壊してしまいました。そして、たくさんの犠牲者や被害を出しました。被爆者の中には、

今もまだ後遺症や差別などで苦しんでいる方もいます。家族や友達、知り合いを失くした方もいます。原爆は、街を消し、多くの人々の身体だけではなく心も傷つけ、被爆者の将来さえも破壊してしまいました。

私は、広島市平和記念式典派遣中学生の一員として「広島」を訪問し、戦争・原爆の恐ろしさ、そして平和の尊さを改めて感じました。

私には、家族や友達など、大切な人がたくさんいます。原子爆弾はそんな大切な人を、一瞬で簡単に消してしまうのです。「今、原子爆弾が落ちてきたら、どうなってしまうのだろう。」と思うと、とても恐くなります。

私たちは、毎日ご飯を食べ、学校に通い、友達にも会えます。家族もいます。でも、そんな当たり前と思っている生活も、戦争をしている間できないのです。そして、原子爆弾が投下された瞬間に、家も学校も、友達も家族も、そして私も。すべてが消えてしまうのです。それまで積み上げてきた歴史は、その瞬間に止まってしまいます。そして、その瞬間から辛く悲しく、悲惨な歴史が始まるのです。

私は広島で、当たり前のような普段の生活が、どれだけ幸せなことなのかを学びました。そして、命の大切さを学びました。だから、一秒一秒、一日一日を大切に過ごさなくてはいけないことを。

今後は広島で学んだことを自分の生活に少しでも生かし、また、まわりの人たちにも伝えていかなくてはいけないと思っています。そして、この世の中から戦争がなくなり、みんなが幸せに暮らせる世界になることを願って、今できることを精一杯やっついこうと思っています。

今も続く原爆の悲劇

我孫子市立久寺家中学校二年 前野 陽

八月五日、僕は我孫子市平和事業派遣中学生の一員として、広島へ行って来ました。

初日、日差しが肌を刺す様な暑さの中、市電や徒歩で移動していると、沢山の慰霊碑や銅像があり、裏にはびっしりと人の名前が彫られています。僕はこれを見て原爆が現実であったことを実感しました。

原爆資料館では、被爆により皮膚がボロボロになってしまった人の写真や腸のひだがはがれて腐り吐いてしまう症状の説明映像を見て、あまりの恐ろしさに気分が悪くなりました。その後、原爆の子の像へ行き折鶴を掛けました。千羽鶴を折れば治ると信じ続けながら死んでいった禎子さんの話を聞くとかわいそうで、もうこんな事は二度とあってはならないと改めて思いました。

二日目、広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式に参列しました。会場には海外の方も多く、世界中で核兵器廃絶への機運が高まっていることが分かりうれしく感じました。

式典終了後に伺った被爆者の伊谷さんと幸本さんの話は衝撃的でした。伊谷さんは十六歳の時に被爆し、がれきの下から自力で抜け出しました。「助けてくれ」と言う近くの人達を助けられなかった事を悔しそうに語ってくださいました。

幸本さんはわずか八歳の時、家族全員が被爆しました。おじさんの傷を布でぬぐうと骨が見えてしまった事や、目の前で人々が死んでいった光景が未だに頭に焼きついているそうです。一番辛かったのは引越先で「ピカドンがうつる」と同級生に差別された事だそうです。戦争になると心もすさむのかと悲しくなりました。

三日目、世界遺産の原爆ドームを見学しました。大破した実物を見ると原爆の恐ろしさが伝わってきました。その後、国

際ボランティアの三登さんのお話を伺いました。最も驚いたのは、被爆者が捕まえられて、治療もされずに後遺症研究の実験台にされていたという事です。鬼のような心に人間を変えてしまう戦争は恐いと思いました。

今までは、原爆により三十五万人が死んでしまったという薄っぺらな知識しかなかった僕ですが、現地で被爆者の方から直接お話を聞く事で、戦争は遠い昔の出来事ではなく、今も苦しい思いをしている人がいる。そして、原爆の悲劇は現在も続いているのだと実感しました。

これから、広島で感じたことを忘れず、原爆の悲惨さ、平和の尊さを伝えていきたいです。

世界の平和を求めた広島

我孫子市立白山中学校二年 郡山 琴美

私は、今回の派遣事業を通して、六十五年前にあった原爆の恐ろしさと被爆者の無念を強く感じました。

あの日から六十五年たった八月六日。世界七十四カ国もの人々が目を向けるようになった「広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式」へ参列しました。

この式典で、私は被爆者の悲しみや世界平和への思いを強く感じました。

家も家族も友達も、日常の全てが一瞬にして消え去ってしまった一九四五年八月六日、午前八時十五分。その時から、被爆者の皆さんは、たくさんの悲しみや苦しみを抱えながら生きてきたのです。

平和記念式典へは、多くの国の代表者が参列していました。その中には、核保有国からの代表者もいました。原爆の悲惨さを心に留め、一日でも早く核兵器をなくしてほしいと強く念じました。

また、三人の被爆体験者の方からお話をうかがいました。

被爆したときの状況は皆さんそれぞれでしたが、『核兵器のない平和な世界になってほしい』という思いは一緒でした。被爆した当時を思い出し、時に涙を浮かべながら精一杯お話をしてくださる被爆体験者の方々からは、原爆の恐ろしさや命の大切さを伝えたいという強い思いが感じられました。

原爆を投下したらどうなるのか。当時、アメリカで原爆開発に携わった人たちは知っていたはずです。同じ人間なのに、人種や国が違っていると相手の痛みや苦しみを感じることができなくなるのでしょうか。でも、それは許されないことです。たった一発の原爆が、一瞬にして多くの人の全てを消し去り、六十五年たっても消せない悲しみを生んだのです。

今日の日本は、戦争のない平和な国になっています。戦争・原爆・・・その過去から学んだからでしょうか。世界には今も戦争や貧困で苦しんでいる人々がたくさんいます。過去の過ちを二度と繰り返してはいけません。世界中が笑顔あふれる平和な世界になるよう、強く深く心に願いました。

平和を伝えていく心

我孫子市平和事業推進市民会議委員 間中 くるみ

戦後六十五周年を迎えた今、私たちは平和な毎日を当たり前だと思つて生きています。学校での戦争に関する授業・沖縄へ修学旅行に行き、ひめゆりの塔を見学、戦争を学ぶ機会はたくさんありました。今まで私は平和な日本に暮らし、戦争に

ついで学んでも、身近に戦争体験した人はいない、戦争があまり身近なものに感じられませんでした。今回、広島派遣中学生に引率をし、平和祈念式典に参加、様々な慰霊碑、広島平和記念資料館などを見学し、被爆者の方々の体験談を聞き、初めて戦争が起こした悲惨な出来事を知ることができました。

私が平和事業推進市民委員として、広島駅に降りたとき見た、青い空や夏の匂いは、私たちの住む我孫子市と何ら変わりありませんでした。しかし、広島平和記念資料館に足を踏み入れると、一転して、そこには戦争の悲惨な空気が漂っていました。初めて見たその光景は、非常に胸が痛くなるものばかりでした。平和記念式が、なぜ開かれ、そしてなぜ続けられているのか、参列するまでは理解することはできませんでした。しかし、実際に参列し、被爆者の方の貴重な体験を生で聞くことができて、式典の重要性、必要性を知ることができたように思います。こうした式典が、悲惨な戦争を忘れないためにも、大切な行事であると感じています。

今も世界の様々な国々で、小さな諍いから、大きな戦争まで絶えず続いています。私たちの身近でも、尖閣諸島の問題で日本と中国との間に緊張感が高まりつつあります。あの広島・長崎に原爆を投下された先の大きな大戦の悲惨さを、私たちが心に刻んでいたならば、罪のない小さな子供たちの尊い命や、夢を奪う、武力衝突は、きつとなくなっていたに違いありません。それぞれの人々が胸の中に、あの戦争で負った深い傷を思い出すことによって、再び命を奪う争いをしてはいけないと、思うことができるのだと感じます。そういった心を、私たち自身がきちんと受け止め、それを後世の人に伝えていくことが、すなわち平和ということを、伝えていくことになるのではないのでしょうか。